グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年３月26日－４月６日）

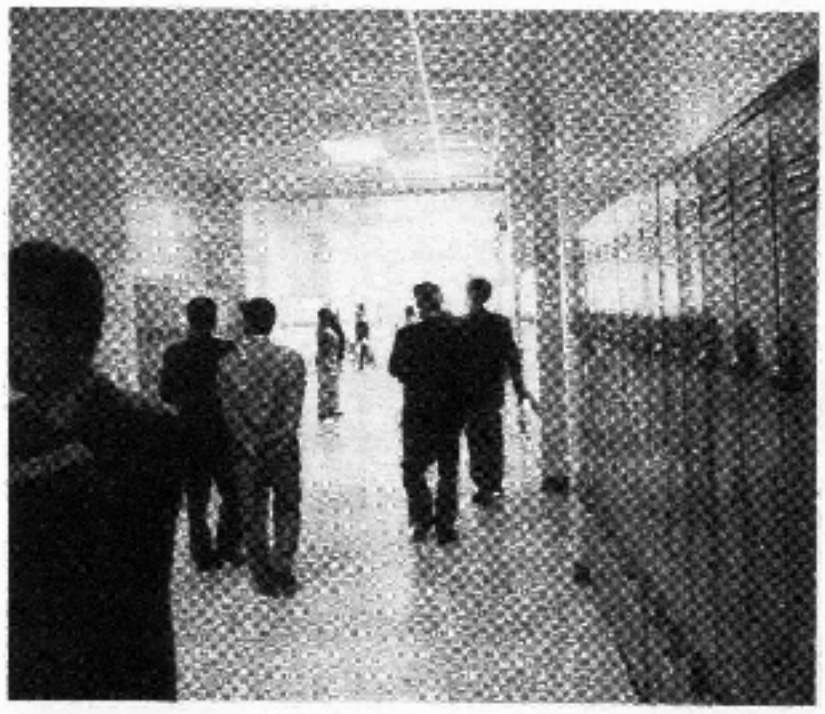
大阪府八尾市立上之島中学校　教諭　　福　田　正　尚

３月27日

朝一番にROSEハイスクールを訪問。バーバラ校長より概要の説明を受ける。第９学年から12学年が在籍。生徒数は1800名。特に美術と体育のプログラムを強化しているとのこと。

朝のH. R. は生徒がT. V. で校内放送。女子10人あまりがソファに腰掛けリラックスした雰囲気で原稿を読み上げている。その後、日本語教室、音楽の授業を見学。設備が整っており、騒がしい日本の中学から訪れた身には、落ち着いた環境で静かだと感じさせられる。

スクールカウンセラーが７名、常駐の警察官が２名。規模の大きさに比例してスタッフも充実しているということか。



廊下にある生徒個人のロッカー

続いて、Martinミドルスクールを訪問。同じく校長の概要説明を聞く。ノース・カロライナ州が日本企業を誘致している関係で、日本語教育を行うよう財界・教育界からの要望があり日本語教育プログラムが設置されている模様。さっそく、日本語を学ぶ生徒に案内されて校内を見学する。広い土地柄もあって、校舎は２階まで。平たく広がっている印象を受ける。床はカーペット張りで、多少ゴミはあったものの、きれいであった。この学校については、以降に詳しくまとめることにする。

次はWahl Coatesエレメンタリースクール。ここも平たい校舎、フラットな造り。どの学校もそうだが、教室は先生の部屋になっており、時間割に応じて、生徒が教室を移動する。私たちの感覚でいえば、全部が教科の特別教室のよう。どの先生も、教室の雰囲気作りには工夫されていて、とりわけここ小学校では、これでもかといわんばかりのデコレーションがあった。学習環境に対するこだわりと、教室の面積に対する生徒数の少なさ、ゆとりを感じさせる。どのドアも、ガチャンと音をたてないようになっており、あたりまえといえばあたりまえだが、鉄のドアを開閉するたびに金属音が響き渡る自分の学校が情けなく思えてくる。設備の点でいえば、情報端末も豊富に設置されており、図書室と呼ばず、メディアセンターと呼ぶのもうなずける。ここでは、全校集会がもたれ、歓迎のセレモニー

日本語のクラス

教室の風景

が催された。ちょうど下校時にあたり、スクールバスの出迎え、雨の中の下校風景など見ることができる。ほんの数分で、学校から人気がなくなるようすは見事。

夕方には今回の研修をコーディネイトしていただいてる現地の大学、ECU の教育学部を表敬訪問。ノース・カロライナ州で一番大きな教員養成の学部とのこと。教員のみならず、司書、カウンセラーなどの育成も行われている。会談の中で、教育改革を進める（もしくは謳う）連邦政府の教育財政、予算などについて質問する。結局は、現場の地方財政の占める割合が高いとのこと。もともと、地方分権的な教育行政ではあるが、しきりに教育改革を謳う連邦政府が「金を出して口も出」しているのではと思っていたがそうでもない様子。ただ、州単位では、後にDPIから説明を聞いてなるほどと納得させられることになった。

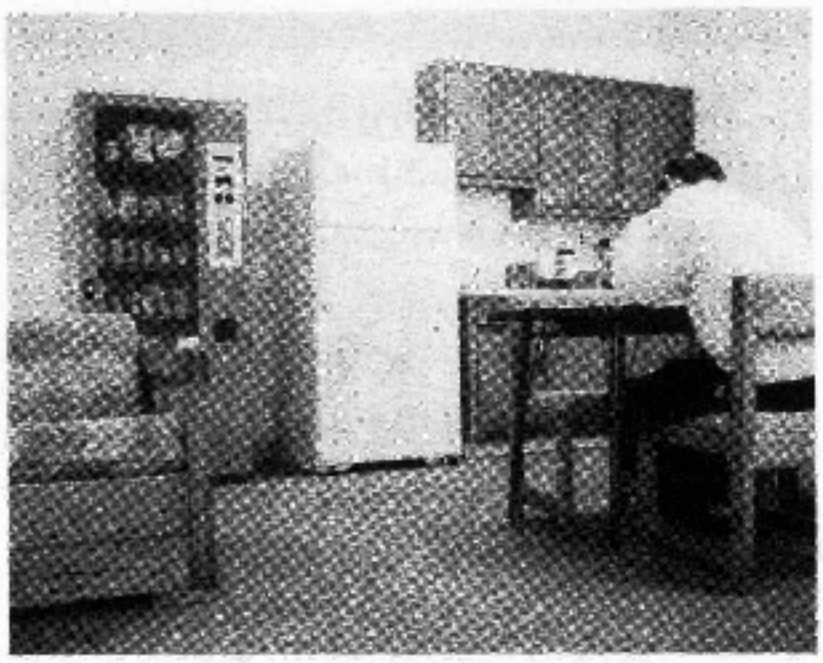
3月28日

本日から担当のMartinミドルスクールへ毎日通うことになる。最初は、昨日校内案内をしてくれた日本語教室から。ここはトレーラーが教室になっている。おいてある机は7つ。この時間の生徒数は4名であった。

日本語教室

担当は日本人の女性教師。日本語で家族の紹介をしたり、好きなこと、やりたいことを日本語でいったりさせている。非常にゆっくりとした授業で、淡々と進んでいく。退屈したり、周りの子に気を取られたりということもない。ま、選択で少ない人数だからこそかなと考える。印象的だったのは、保護者に出した成績の中間報告書。3週間に一度、レポートが出され、提出物やすべての記録がコンピュータから打ち出される。これに保護者のサインを得ておくのだそうだ。そうしないと、成績評価に関わって保護者から教師が訴えられることがあるらしい。「契約社会」そんな言葉が頭に浮かぶ。

次は6学年の学年会議を見学させていただいた。学年会議と教科会議は週1回行われるとのこと。5月に予定している遠足－バスでワシントンD. C. に行くらしい－の打ち合わせ。こういうときは生徒のいない教室を使うのだが、スナック菓子とジュース類をのべつまくなしに口に入れるのには感心する。そういえば、職員室の近くに、冷蔵庫や自販機、ソファやミニキッ



ラウンジ

学年会議のようす

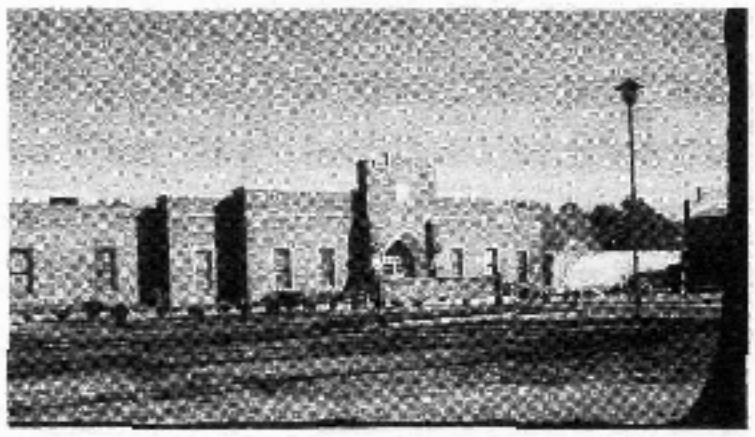
授業中

チンのあるラウンジがあって、休憩室のようになっていた。

教師は多忙で、1日のうち空き時間は1時間ぐらい。それも授業準備や打ち合わせに使われる。授業と授業の間は4分で生徒の移動時間。その時も、廊下に先生が出て静かに並ばせ、チャイムと同時に教室に入れさせる。昼食時も食堂まで生徒とともに移動し、ずっといるから、のんびりした時間がない。

その昼をはさんだ授業は地理の授業。4～5人でグループを作り、課題をおこなっている。どうやらヨーロッパの国のことを調べ、訪問する計画を立てる課題をやっているらしい。とにかく静か。こんな作業の時には誰かが声を出したり、何かするものだが、そんなことはない。先生は、いろいろ説明するが日本の教師に比べて表情に乏しい。私たちだといろんな表情で惹きつけたり注意を喚起したりするものだが、にこりともしない。かといって怒っているようでもないみたいで、奇異に感じた。このクラスと食堂に行き、昼食をとったので、生徒たちに尋ねると、学校はおもしろいし、先生も好きだとの返事。ロビーで先生をはさんでクラスみんなの写真を撮った。人間関係はできてるんだなぁと思わされた。

最後の時間は、この学校で日本の学校をモデルにした「学校内学校」プログラムを展開している先生のクラス。教室には8人ぐらいの生徒。学習に遅れがちの生徒のクラス。数学の計算練習を繰り返している。それだけでもたないから、後半はこのプログラムでおこなっている班別プレゼンテーションの練習となる。コンピュータ、プレゼンソフト、プロジェクター、こういった機器を使って、いろんな国と自分たちとの比較をまとめるらしい。日本で流行している音楽、人気のあるスポーツなど聞かれる。また、質問の中に「何年の先生?」というのがある。むこうは持ち上がりなどなく、受け持ち学年は固定なので、そう聞くのだろう。



学校正面

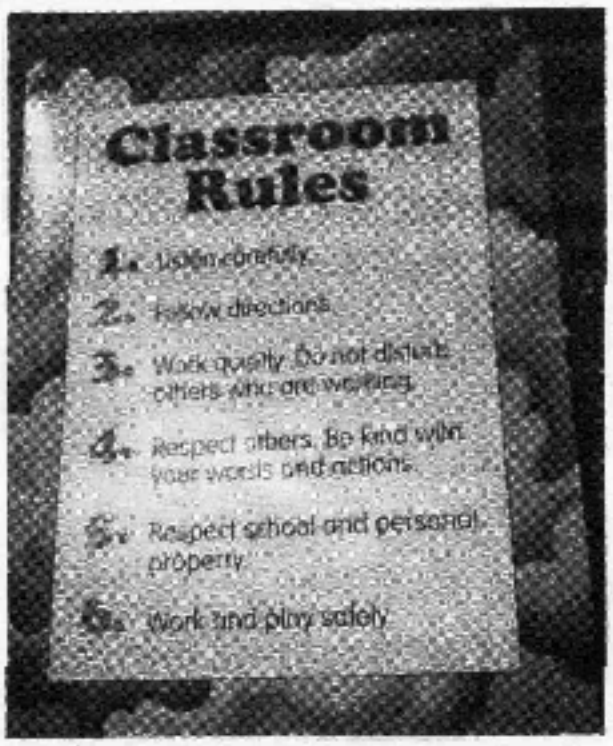
2時45分、終業。H. R. クラスでの終学活などなく、教室のスピーカーから聞こえる校長先生の連絡と注意で終わり。同時に人の波が正面玄関へと続く。あっという間に学校には人気がなくなる。くだんの地理の先生も日本の学校教育に興味を持っておられ、放課後は日本のようにクラブ活動をしたい、その方がいい人間関係を築けると思う、と語っておられた。

3月29日

朝は選択の日本語教室。日本から同行された先生が持参した相撲のビデオを見て、授業に使われた。正解の時には「ピンポン」間違うと「ブー」というサインが通用しているので笑ってしまう。

次は例の「学校内学校」クラス。別の同行した先生が、日本の中学校で席替えの方法を話し合っているビデオを見せ、質疑応答。一つの教室に40人いることが信じられない様子。おしなべて生徒の行儀がよい。黙って挙手し、指名されるまで声を出さない。また、発言者の話は必ず聞いている。これはどこでも徹底していた。また、質問や感想、自分の考えをはっきりと即座に述べるのにも感心させられる。「別に…」とか「わかりません。」というのは全くといっていいほどなかった。

そんなアメリカの生徒が日本の学校を見て奇異に感じるのが、先ほどの40人学級、制服、学活など。学活のビデオでは「先生はどこにいるのか」という質問があった。私の持参した学校紹介ビデオのクラブ活動を見たときも、アメリカの教師から「このグランドに監督はいるのか」という質問がでた。廊下で待機するときも、食堂で昼食をとるときも、常に教師の管理が必



市販の物や教師の手書きもある

要不可欠というアメリカの学校。行儀の良さと徹底した管理。このあたりに何かあると思わせる。

続いてスペイン語の授業と、コンピュータスキルの授業。選択の時間。どちらの授業でも感じたのだが、どうも授業にヤマ場というか、盛り上がりがない。同行した先生は「展開がない」と指摘されていたが、確かに、練習や課題を次々と進めていくだけで、淡々とすすんでいく。生徒が静かで行儀もいいから、それでおさまっていくようだが、日本ではそれなりにドラマ性というか、シナリオというか、一つのまとまりを考えるのだが、そういうことは気にならないのだろうか。後で聞いたところによると、訪米した時期、イースターの後というのは年度末までのダレる時期なんだそうで、教える側も教えられる側もしんどい時期らしい。

昼休みに少し、教職員の勤務についていくつか質問。教師が休む場合は、校長が代わりの教師を用意する。自宅待機中の非常勤講師（?）がいて、急遽派遣されるらしい。夏休みなどの休業中について。学校は基本的に閉校。その間の給与が気になるところだが、年俸制なのでそれを12ヶ月平均してもらう人と、休業中の2ヶ月を引いて10ヶ月で割ってもらう人もいるらしい。長年の疑問が氷解。

午後は7年生のクラスで、これまた同行された先生の中学3年間の思い出ビデオを見て、日本についての授業。

1時間ほど、スクールカウンセラーと懇談。

この学校には2名。開口一番、配置人数が足りない、

カウンセラーのオフィス　一人一部屋

どの学校でも要求している、という話であった。カウンセラーの対象になるのは、ケンカ、親とのまさつ、教師とのトラブル、成績の問題、等々。日本でいえば生徒指導と養護教諭のような仕事になっている。これでは2名では少なかろう。1日に5人以上は相談をするとのこと。生徒自ら話を聞いてもらいたくてくることもあるし、教師からカード一決まった様式があり、どういった項目で相談を求めているかわかるようになっている一が回ってくる場合もあるとのこと。昔は教師と一緒に家庭訪問することもあったそうだが、今ではソーシャル・ワーカーにひきつぐらしい。また、同じ生徒が何度も問題行動を起こす場合にはセラピストなどに援助を求めるそうで、社会的に分担ができている。

とはいうものの、これだけ忙しいと仕事も大変で、増員が必要なのだが、組合のように教職員が増員を要求して運動することがあるかという質問には、「ない」との返事であった。

3時からの職員会議に参加させてもらう。これまた自分の職場とはずいぶん異なる。参加者は教職員全体。当然、スクールカウンセラーも出席。場所はメディアセンター、日本でいう図書室。案件にそって校長が提案、というか延々とスピーチ。指示がほとんど。登校時のバス降り場付近でジュースのパックが捨てられていたとか、最近生徒がサンダルやスリッパを履いてきているが、あれはよくないとか、学校での紙の使用量が増えているとか、そんな話もあった。内職している先生もいたが、おおむね静か。反対意見も出るけれど、ここでリーダーシップをとれないと管理職としてはだめらしい。ちなみにアメリカの学校の管理職は、教職経験は少なく、早くからマネィジメントの途をめざしてきた人がほとんど。スクールカウンセラーも含め、校内での役割分担が徹底している。

3月30日

今日のハイライトは3クラス合同の班別プレゼンテーション発表会。一つの教室に「学校内学校」3クラスが入るから寿司づめ状態。さすがに騒がしくなり、教室の人口密度と関係するんだなぁと考えさせられる。

テーマは異文化理解。自分たちの設定したテーマにそって、どこかの国と自分たちの学校との統計を比較し、プレゼンテーションをコンピュータでおこない、

食堂にて

お互いに合評しようというもの。曰く、日本の学校の通学方法と私たちの学校、南アフリカの宗教と私たちの学校、イスラエルの職業希望と私たち、などなど。班別学習の発表会、といえばわれわれになじみやすい。というか、日本の学校でやっているものを追求するチームなので、当然。別の先生も言っていたのだが、どうやら、日本ではグループで課題を研究し、討議しながら共同で作業を進めるといったグループ学習が効果的におこなわれていると信じ込まれているらしい。

すべての班が発表するには時間がかかったが、押し込められた割には私語も少なく、どの発表も堂々としており、質問や感想も積極的に出た。途中、英語のたどたどしい子の発表もあったが、よく聞いていた。

午後、3人の先生と彼らのプロジェクトについてインタビュー。前年度、日本を訪れた先生が強く印象づけられたことは、生徒が非常に静かで行儀よいことであり、そのためにも日本式の教育を取り入れたいと現在の「学校内学校」プロジェクトを進めているとのこと。ポイントは、生徒をよく知り、人間関係を深めることとか。学年9クラスのうち、このチームが担当する3クラスのみを別枠扱いし、選択の時間を利用して相互に乗り入れ、まさに別の学校のように位置づけている。さらには、来年度他のクラスは別としてこの3人の先生は持ち上がりをおこなうとか。学年固定が原則のアメリカの学校で、こういうことをすると他の教師が学年移動することになるのだが、この計画について学校全体の合意はとれていないとのこと。なのに強引に進められるのは、校長の指示。クラス編成も校長がおこなうという、リーダーシップ故に成り立つ話。

3月31日

朝、6年生のクラスで、日本から持参した学校紹介ビデオを見せて日本の学校を紹介。様々な質問が飛び出すが、その場ですべて答えず、日本に持ち帰って、日本の中学生に返事を書かせることにする。彼らの質問カードを見ていると、制服のこと、教室の狭さのこと、学校の教科のことなどが多い。また、放課後のクラブ活動の様子を見て、教師はどこで監視しているのかという心配をされたことは前述のとおり。

メディアセンターでおこなわれていた、卒業試験前の補習クラスを見る。接頭語・接尾語を探しているのだが、教える先生もていねいで優しく、今までと少し雰囲気が違った。補習クラスということもあるのだろうが、こういう感じの授業もあるんだと安心する。とにかく、ほめる。小さいことでもしっかりほめて、やる気を起こさせている。他の時間でもほめることはほめていたが、こんなに優しい感じは初めてだった。

アメリカの先生の車に乗せられて町中を案内してもらう。Tar川、洪水のあと、有名な墓地など巡る。南北戦争の犠牲者の墓や、ゲティスバーグの戦いで死ん

発表風景

An American Assembly

だ将軍の墓など見る。

いよいよ最後の時間。週末の最後はAssemblyということで、音楽発表。さすがに週末、最後の時間となると、お行儀のよい生徒も疲れてくるのか、注意されたりする事も増える。

曲目は有名な曲ばかり。写真は「I Have A Dream」で、キング牧師の演説をスピーチしているところ。他にもチャールストンのダンスなどもあったが、生徒たちは恥ずかしがらずほんとに気持ちよく演じていた。こういう風景は日本であまり見かけなくなったように思う。

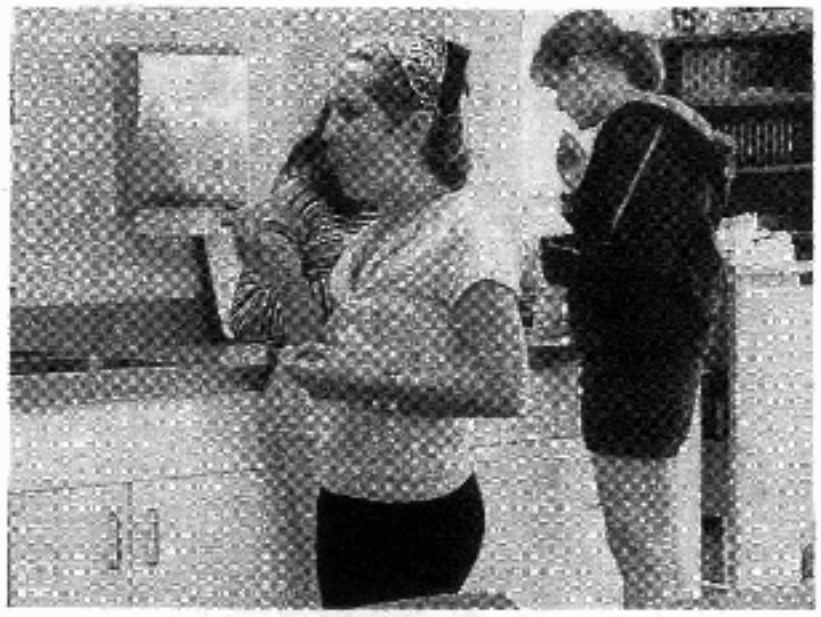
この日でこの学校も最後。記念のシンボルカラーのポロシャツをもらい、いっしょに記念撮影をして学校をあとにする。

4月3日

他大学への派遣チームと合流していよいよまとめ。まず今アメリカで生まれているチャータースクールの一つ、Exploris ミドルスクールを訪問する。1996年にチャータースクールとして認証された学校で、Exploris博物館に属するミドルスクール、博物館の教育部門ということになる。校長先生の話は自信に満ちたもので、優れた理論に基づいた実践をめざし、実践的試みを積み上げ、教育研究の交流をおこない、ノース・カロライナ州の教師に広める役割をもち、地球市民としての教育をおこなっていることを説明された。

ノース・カロライナ州のミドルスクールの在籍数の平均は800〜900人であるが、ここは168人と、研究校的位置づけがわかる。説明の中で、幼年期や高校時代の研究は進んでいるが、ミドルスクール初期の年頃は研

ポートフォリオを説明する生徒



休み時間は教室ですぐお菓子

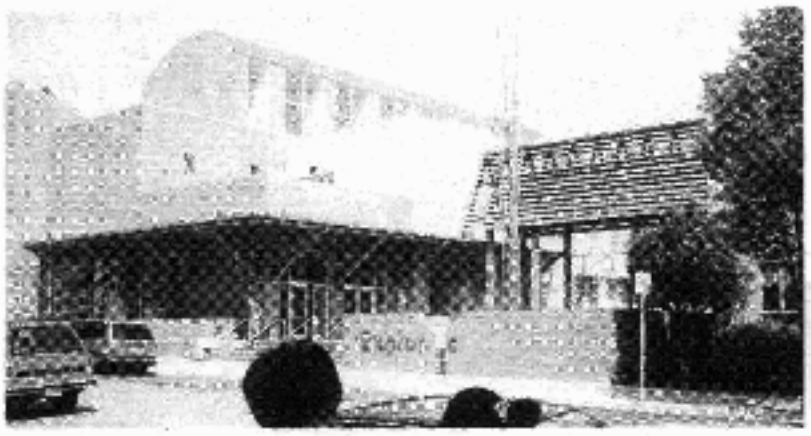
究不足であると言われていた。日本の学級崩壊、中学生の「荒れ」やを考えるとき、日本でも10代前半の「こころ」の研究が再度必要ではないかと考えさせられる。

基礎学習に加え、批判的な観察眼・自立した学習・広範な視点から思考できる世界市民としての意識を念頭においた学習を組み立てている。生徒の学習評価は数字で行われず、生徒自身が自分の目標を持ち、2週間単位でチェックリストに基づき自己評価、ポートフォリオという学習の記録をファイルしたものをもとに、三者懇談において自ら、親・教師にプレゼンテーションを行うという形で行われる。

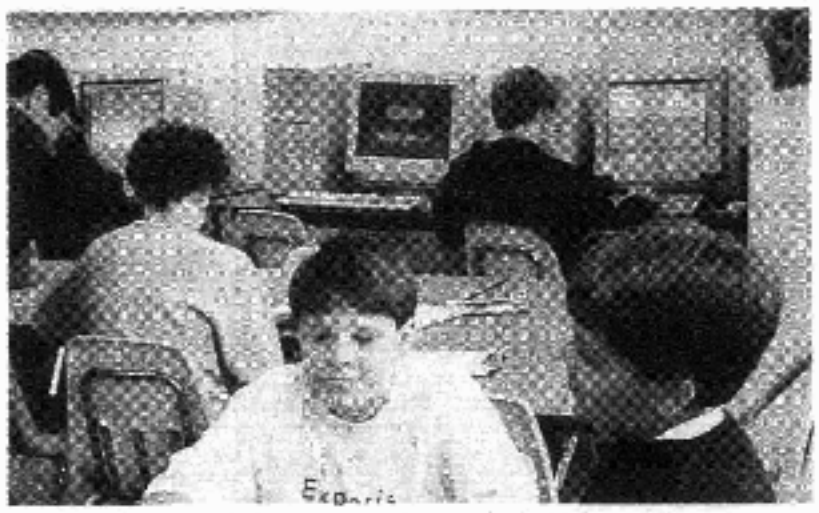
チャータースクールは州から予算をもらうだけに、希望者は受け入れ。人数が多いと機械的に抽選を行うということであった。入学時には学力差もあるし、学習障害を持つ子も少なくない。入学希望は結構多いらしい。また、アメリカのどの学校でも見られたスクールカウンセラーがいない。教師がその役割を果たており、深刻な事例ではセラピストを呼んで対応するとのこと。

教師一人あたりの生徒数は14人。日本の学級定員とは意味が違うが、その分きめ細かい指導と保護者との連携をおこなっている。

チャータースクールの存続を決める評価基準が気に



Exploris博物館　生徒はここを利用できる



教室でコンピュータを使う

州の卒業テストに備えて補習する8年生

なっていたのだが、学内では5年ごとに、自校のチャーターに照らしてどうかというチェックをおこなう。ノース・カロライナ州ではチャータースクールの制度はまだ新しいので、州の具体的な基準はまだないらしい。ただ、州統一テストの成績や、保護者の意見、学校評議会の評価などが関与するであろうことは明らか。州のテストが関わるとなると、独自のカリキュラムをもつチャータースクールの独自性が失われないかと心配されるが、州のテストはあくまで用具的な教科、基礎・基本のものであり、内容教科は州のテストにふさわしくないので、ここのチャーターから言って問題ないとのことであった。ちなみに、州の統一テストの結果トップ10に入っていると説明された。

午後は、州の教育委員会事務局DPIを表敬訪問。ノース・カロライナ州の教育行政について説明を受ける。

前半はWISE OWLと呼ばれるテクノロジー開発について。

コンピュータを使いこなすということは、必須条件となっており、学校教育においてもそのためのカリキュラムが必要。この見地からコンピュータ・スキルのカリキュラムが設定され、ミドルスクールの8学年に実施される州テストではコンピュータ・スキルの科目がある。また、ノース・カロライナ州で教員免許をとるためにはコンピュータ・スキルに関するテストに合格しなければならない。

すべての教室からインターネットにアクセスできるし、今後はインターネットの適切な使い方を学ぶ学習方法の開発が求められていた。

次は、ABCsおよびABCs Plusと名付けられた、ノース・カロライナ州の教育改革の動向と Student Accountability Standardについて。Accountability, Basic, local Controlの頭文字をならべたこの計画は、生徒の学力向上、安全で規律ある学校、質の高い教職員の配置、家庭・地域との提携、そしてその効果的な運用といった優先項目を設けた目標・評価基準からなっている。このあたりは全米の教育改革－「危機に立つ国家」から GOALS2000にいたる動き－と同じ流れにあると感じられた。ただ、日本のように強力な中央集権の文部行政による TOPDOWN とは違って、地域の世論、州議会の議決を得た動きであると説明された。

その評価方法と実施手段が気になるところであるが、各学校の教育効果をはかるのに使われるのが州の統一テストである。2年間の成績の伸びを回帰分析し、今年度の予想伸び率を想定。この予定に対してどの程度到達したかをはかるというもの。50%以上の生徒が予定の伸びに到達しない場合はロウ・パフォーマンススクール (LPS) となり、特にひどい場合には当該校にアシスタント・チームを派遣、授業の分析や模範授業を見せたりして研修 を深めさせるらしい。

一方、予想水準に到達した学校職員には750$のボーナス、予想より10%以上の伸びを達成したら1500$のボーナスが支給されるとのことであった。(ラフな見積もりによるとノース・カロライナ州の教員給与は全米29位、全国平均以下とのことであった) ノース・カロライナ州の DPI はこのプログラムにずいぶん自信を持っていて、全米のモデルとなっていると自負していた。事実、LPSは減少し、特別ボーナスを支給される学校が増えているのだそうだ。また、現場の先生方の意見もまちまちで、少し聞いたところでは不評であった。自覚的に学力保障という自己目標を持つ者からすれば、ありがた迷惑。教師の意識レベルをどう見ているのか。このあたりが気になる。

ただ、伸び率だけで判断されているが、本来のその学年における到達目標に達しているかどうかという問題は残るらしい。人種による差もはっきりしており、白人で79%が到達、黒人は48%となっており、到達目標達成への支援策の検討も含め、まだまだ課題は多そうだ。

日米の教育交流をとおして見えてくるもの

大阪府八尾市立上之島中学校　教諭　　福　田　正　尚

(1)　はじめに

以前、アメリカの学校はたいへん自由でのびのびとしており、制服もなく、お菓子やガムを自由に口にし、くつろぎながら学習していると、日本の学校の窮屈さをほのめかすように言われた時期がある。今、ふたたびアメリカの学校と教育が日本のそれらと比べる意図で語られることが多い。ひとつはカリキュラムのことで、アメリカの学校では選択教科やテーマ学習などバラエティに富んでおり、生徒が退屈したり学習動機を失わないようになっている、という紹介の仕方。もう一つは、生徒の姿勢のことで、アメリカの学校は学習に関しては厳しく、甘えは許されないと、日本の生徒の状況を憂えて語られる場合である。

反対に、アメリカの学校教師が日本の学校や生徒に対して持つイメージは、生徒は行儀よく、学習に対するレディネスができていて、学校での規律づくりなどほとんど問題にしなくとも大丈夫であるという、学級崩壊や荒れ、不登校やいじめの問題などとは無縁の認識である。

これらは自国の教育問題について教育制度を批判的に問題にするときに言われることなので、誇張して語られることが多いものの、両国間の認識のズレや問題意識を象徴していて興味深い。私たちが明らかにしなければならないことは、両国の学校の実態であり、その差異と共通点である。違いをことさら強調するのではなく、両者にある本質的なものに注目していくことは大切である。

今、それぞれの国の教育がどこへ行こうとしているのか、地球や世界がどんどん小さくなっている今、子どもという、人類が未来へ託す財産をいかに育てるか、日米両国ならず、グローバルな交流や共同のネットワークづくりは必ず必要になる。お互いの実践交流と共同研究をすすめていくことは、その点でますます重要であろう。

米国の学校を訪問して、限られた日程であった故に観察が不十分であったり、事実認識に誤りがあることは十分承知の上で、報告をおこないたい。

(2)　研究の概要

①アメリカの学校における人間形成と規律について

アメリカの学校は「個人の持っている能力を伸ばす」ことを主眼とした教育を行っている。そのため、習熟度別の授業編成、飛び級などがあり、厳しい能力主義のもとで鍛えられているとされる。授業も黙って講義を聴くのではなく、活発に発言し、質問する。同時に、規律の面からも非常に厳しく生徒・学生は鍛えられると聞く。

日本とは異なる価値観や社会通念。教育制度は、それと密接に結びついているのであるから、教育活動の実態を確かめるとともに、両国間の文化の違いから教育制度に差異が生まれるのは当然のこととして、それぞれの長所・短所を明確にし、どう今後のプログラムに活かしていけるのか探っていきたい。

また、競争がもたらす人間関係の熾烈化、複雑化も問題であるとされているし、教師と生徒との人間関係も非常に気になるところである。また、スクールカウンセラーが各校にオフィスを持っているとされるが、学校内での位置づけや役割分担、存在意識などについても知りたいところである。

②教育条件整備の実態について

クリントン大統領は、教育の充実こそが次の世紀への重大な課題として、教育政策に力を入れることを明言している。学級定数、人員配置、など教育の環境づくりに関わる行政の姿勢や、社会での認識の度合いを明らかにしたい。

また、生徒が情報検索を行えるようにどのような設備投資や環境づくりが行われているのか、学内のインターネット端末の利用状況も確認したいところである。

③教育活動の評価について

アメリカの教師は授業を進めるために、かなり多くの時間をかけて準備すると聞く。また、自分の行った授業に対する評価が大変厳しいとも聞く。授業の評価は具体的にどのように行われているのか。かなりシビ

アに行われているようだが、その具体的な方法と待遇との関連を確かめたい。たとえば、チャータースクールのような、競争に負ければ廃校になるというやり方に、アメリカの教員の意識はどうなっているのか、知りたいところである。

④現地調査の日程

日　時	場　所	内　容	関係者・関係機関
3/27 (月)			
8：30	Rose High School	学校訪問　授業見学	
10：30	Martin Middle School	学校訪問　授業見学	
13：45	Wahl Coates Elementary School	学校訪問　授業見学 全校歓迎集会に参加	
15：00	East Carolina University	教育学校長、大学学長と面談	Dean of the School of Education Chancellor and Vice Chancellor
3/28 (火)			
8：30	Martin Middle School	日本語学級で授業参観	京塚先生
10：00		第6学年の学年会議を見学	
11：30		第6学年の地理の授業参観	Jeff Girvan
13：30		第7学年の授業参観	Scott Tiernan
14：30		「学校内学校」のチームの先生と懇談	Scott Tiernan,Marshall Matson, Andrews
3/29 (水)			
8：30	Martin Middle School	日本語学級で授業参観	京塚先生
9：15		ビデオを見ての授業打ち合わせに同席	Scott Tiernan
9：45		授業参観	
10：30		スペイン語の授業見学	
11：30		コンピュータ・スキルの実習見学	
12：30		ビデオを見せての授業参観	Andrews
14：00		スクールカウンセラーと懇談	School Counselor
15：00		職員会議を見学	
3/30 (木)			
8：30	Martin Middle School	Matson 先生に連れられて近くを散歩	Marshall Matson
10：00		教育委員会と教職員との会談を見学	
10：30		「学校内学校」のチームのグループ別プレゼン発表会参加	Scott Tiernan,Marshall Matson, Andrews
13：00		「学校内学校」のチームの先生と懇談	

3 /31 (金) 8 ：30 9 ：45 10：25 11：33 13：45	Martin Middle School	第6学年で学校紹介のビデオを見せて授業 第7学年で国語の授業参観 第8学年の文法補習参観 近隣を車で観光 Assemblyに参加	Jeff Girvan Marshall Matson Grady Marshall Matson
4 / 3 (月) 9 ：00 13：00	Exploris Middle School DPI	学校見学　授業参観 DPI訪問　講演を聴く	Exploris Middle School North Carolina Department of Public Instruction
4 / 4 (火)	Summary Conference		

(3) 研究の結果と考察

①アメリカにおける教師と生徒の人間関係

アメリカの学校の教室を訪れて驚くのは、非常に静かで勝手な発言がないことである。質問や意見・感想を求められたら挙手して指名されるのを待つし、誰かが―それが教師であっても、生徒であっても―発言するときは、割り込んだり、別の話をしたりしない。それが当たり前と言えば当たり前なのだが、今私たちの学校ではどうであろうか。学校における秩序と行儀。この点について言えば、訪れた学校のほうが日本の学校より数段すぐれていると感じられた。

しかしながら、アメリカの教師は日本の生徒の行儀良さや、学習姿勢を良しとする。事実、日本の学校を訪れた教師でさえ、そう言ってほめていた。なかんずく、学校の日本化を進めるプロジェクトまですすめている。

何がアメリカの学校の秩序を支えているのか。

どの教室にも「クラス・ルーム・ルール」が掲示されてある。「この教室では、勝手にしゃべらない」とか「～するべからず」などである。日本の中学校では概ね、ＨＲクラスの学級目標があって、自分たちが討議して決めた目標なり約束事が書かれてある。または、美化委員会からの「ゴミはゴミ箱に捨てましょう」などのポスターなんかがある。

アメリカの学校の教室は先生の部屋である。その教科の時間には、生徒がその先生の部屋へ移動する。掲示されているのは、先生がその部屋の主として、生徒に守らせる項目であって、この約束を履行することによってこの教室にいられるという契約内容である。書いてあることが同じ内容であっても、この「クラスルーム・ルール」と「学級目標」に、日米の学校における生徒観、教師と生徒の関わりの違いを見出すことができる。

訪れた学校では、授業と授業の間のたった4分間に教室から教室へ移動しなければならない。教室の前では列を作って並び、入室を静かに待っている。ほとんどの教師は廊下に出て、並ぶ生徒を監視し、チャイムが鳴るまでは教室に入れない。あまりに整然としているので感心していたら、生徒というものは、常に教師が監督しコントロールしておかないと何をしでかすかわからないというのが前提だと言われた。アメリカの学校に見た生徒たちの行儀の良さにはこういう背景がある。生徒に渡されるハンドブック（日本で言う生徒手帳か）にはやってはいけないことが事細かに明記さ

れ、違反行為にはどう対処するかもきちんと書かれてある。昼食時には食堂にクラス単位で移動し、その時の授業の先生の監視下で食べる。等々、日本では管理主義として避けられつつあることが、学校の規律保持のためにおこなわれている。

日本で「いい先生」たらんとするときは、年々困難になってきてはいるものの、人としての生きる道を示しながら信頼関係を築くことに主眼がもたれてきたように思う。信頼されることによって人間関係を築き、教師と生徒1対1の関係から、生徒同士のよりよき集団をつくり、高め育成することが評価されてきた。そのためには、学習指導のみならず、クラブ活動での関係、家庭の状況把握による相談など、トータルな面での関係づくりを持とうとしてきたし、いろんな役割を教師が果たそうとしてきた。信頼をもとにした人間関係をつくろうとする日本に対して、アメリカは、一言で言ってしまえば契約をもとにした人間関係をつくろうとすると言えるのではないだろうか。

アメリカで聞かされた「いい先生より強い先生」という言葉は印象的であった。言い換えれば、契約事項を履行させる能力のある先生ということになるのであろうか。ISS などの処遇は「罰ではなくて結果だ」と言い切るアメリカの先生の言葉は、契約という概念を想起させる。契約を履行できない生徒に対する指導は、今や日本の学校にも必要だと言われているスクール・カウンセラーの手にゆだねられていく。教師が何もかも背負い込むことは考えられない。この研究に日本から行かれた先生から「(アメリカの) 先生が子どもから遠いと感じる」と指摘されたのは的を射ている。確かに、生徒が教師を見る眼は複雑なものがあり、訪問校のスクール・カウンセラーが多忙ゆえに各学校に増員が必要だと訴えられていたのも印象的である。

こうしたことを背景に、日本的な要素を取り入れた実践をすすめようというプロジェクトが生まれるのも理解できる。訪れた学校では、「学校内学校」として、学年中の数クラスを日本的な環境に持ち込むプロジェクトを進めていた。教師も学年で持ち上がり、グループ学習を取り入れ、できるだけ生徒と教師や生徒同士の人間関係を深めていこうというものである。日本の学校における放課後のクラブ活動を人間関係を深めることに有意義だと考える先生もいた。

多民族国家、アメリカ。多様性の中での秩序を保持するためには、日本から見れば割り切ったとも言える方法が必要なのかもしれない。教育活動のあり方が、その国の文化や社会の一つの断面であるならば、なるほど納得できる姿である。同時に、いい意味でも悪い意味でも高い均質性を誇ってきた日本の社会に価値観の多様性が認められつつある今、こうしたアメリカの学校における規律の保持の方法は示唆を与えるものと思われる。

②教育条件整備と評価

日本で30人学級を考えるとき、クリントン大統領の教室の中に学級定員の話が出てくるのは興味深い話である。教育条件整備が大統領の演説に出る背景には、今進められている教育改革の動きがある。スプートニク・ショックー「学校の人間化」の流れは、学力低下を憂う「危機に立つ国家」であらためられ、チョイス・プラン導入で学校の特色づくりを促し、学校の社会的責任が強調され、2000年に向けての全米的な教育目標が設定されるなかで、アメリカの学校に何が起こっているのか、とりわけ現場教職員の考えがどうなのかが興味あるところであった。行く前の予習 (?) では、今までになく連邦政府の関与が強くなってるような趣であったが、教育学部長や教育委員会でのインタビューでは、大統領の演説などは政治的意味合いが強く、実際には州・学校区単位の動きであるとの説明であった。

主にノース・カロライナ州の教育委員会の説明になるが、州議会・地域の要請を受けて、到達目標を設定し、評価するプログラムをすすめている。その中で興味深かったのは、一つはコンピュータ・スキルの問題。もう一つは学校評価をどうおこなっているかという問

題である。

社会に出て有用な知識・技能を身につける、この点から言えば、道具としてコンピュータを使いこなすことは必要不可欠となっている。ノース・カロライナ州ではWISE OWLと名付けられたコンピュータ・スキルのカリキュラムがあり、実際、教室でのキーボード・トレーニングや、すべての教室からインターネットにアクセスできる環境、図書室とは言わず、メディアセンターと呼ばれることなど、生徒が利用するものとして充実していた。また、州の第8学年のハイスクールに進学する際のテストではコンピュータ・スキルが必須になっているのも時代を感じさせる。と同時に、生徒個々の能力を開発するに必要と見るや、すみずみまで整備・充実させる姿勢には見習うべきものが多い。

第2の学校評価の問題である。渡米前には、教師の授業評価－教師間、生徒から、保護者や地域から、教育委員会など行政から－がどうおこなわれているのか興味を持っていたのだが、それについてはあまり追求できなかった。訪問先の学校では、研究授業などもないとのことであった。反面、教育委員会のABCs、ABCs Plusの説明では興味深い話を聞くことができた。内容については、自分のジャーナルに譲るが、回帰分析から出された予想到達目標に対しての達成度、パフォーマンスが教師の待遇、給与にも反映するというのは、いかにもアメリカ的である。が、聞き及んだ範囲では現場教師の反応は否定的であった。教職員の職業意識や待遇、条件に関する意識の調査は十分にできず、残念であった。

(4) 今後の展望

日本の中教審で「個性の尊重」という概念が登場した1983年、アメリカでは「危機に立つ国家」が出て、カリキュラムをハードなものにする教育改革の必要性が説かれた。そのアメリカで教育サミットが開かれ、理科・数学の学力向上や学校の秩序保持などを盛り込んだ教育目標がナショナルなものになった89年から90年代初頭にかけて、日本では指導要領が改訂され、「ゆとり」「個性尊重」「新しい学力観」などのスローガンが文部省より打ち出された。そして今、センセーショナルではあるけれども「学力低下」が話題にされている。確かに、IEAの調査では、順位は高いものの、数学や理科が嫌いという生徒が増えていることが明らかにされたし、文部省（現文部科学省）は指導要領の常時見直しをおこなう方針を決めた。

こうして見ると、あたかもアメリカの流れと日本の動きが10年ほどの期間をおいて錯綜し、交代劇を演じているように見え、お互いの切り替えの時期に同時点における日米の差が強調されるが、時点をずらせば、ともに同じ課題を抱えていることには変わりがないことがわかる。

初めて目にするものは、違いばかりが目についてしまうものだが、学校の規律づくりや生徒へのアプローチ方法については同じ土台で研究できるものであるし、アメリカの学校から学ぶものも多い。

さらに、学習への動機づけをどうおこなっていくかを比較・交流しながら研究を追求していきたいものである。今回は、あまり考察できなかったが、授業方法、とりわけ、どう興味・関心をひき、学習に引き込んでいくか、できれば深めたいところである。

なお、訪問先の学校で自分の勤務校の学習紹介ビデオを見せて、日本の学校生活について多くの質問を受けた。その質問をアメリカの生徒に書いてもらい、日本に持ち帰っている。選択の英語クラスで、アメリカの中学生の質問への返答とアメリカの中学生への質問をEメールで訪問校に送り、ささやかながらの交流をおこなおうとしている。残念ながら、日本と学期の時期が違うためようやく新学年で動き始めたときにはアメリカの学校は年度がわりに入っているのと、まだ日本の中学には設備の面で遅れていることもあって、送信手前で待機中である。できれば、何回かやりとりが続いてくれればと願っている。

(5) おわりに

最終日のサマリー・カンファレンスの場で、いろいろ違いはあっても、教育活動の本質は国境を越えて普遍的であるということを感じた。次代の、よりよき社会を形成すべく、次世代を育てるというのは人類の大きな課題であると言ってよかろうと思う。平和な未来をつくること、住みやすい社会を築くことが、私たちの子孫に対する責務であると同様に、その世界を維持し、さらに発展させて次世代に継承させていく担い手を育てることも私たちの責務である。

そうした思いは、万国の教育活動に携わる者の共通の思いではないだろうか。いずれ、政治・経済のボー

ダーレス化にともなって、教育のグローバル・ネットワークが生まれ、必要になる時代がくるに違いないことを痛感した。その中でも、このプロジェクトが成功し、先駆的役割を果たすことを願ってやまない。

アメリカの学校に見る教育システムの多様性
－学校訪問で感じたこと－

鳴門教育大学附属中学校　教官　　近　藤　博　之

(1)　はじめに

近年、日本の学校教育の中では従来の画一的、一斉教育から脱し、いかに集団の中で生徒一人一人の個性を尊重するかということが最大の焦点となっている。社会構造の激しい変化に対応し、将来において生きて働く力という新しい学力観を前提として、選択教科の拡大、総合的な学習の時間の導入と足早にしかも全国的な規模で教育改革が進んでいく。

移民によって拡大し、様々な言語・文化を持つ人種の坩堝であるアメリカの社会にあって、多様性を認めること、個（個人）の尊重は常識である。いろいろな国の文化が融合してでき上がった国である以上、互いの文化や習慣が違うことを前提に、意見を主張しつつも、接点を見つけるために歩み寄る術を自然と身につけてきたのかも知れない。異質なものの存在を認めることが国際理解の基礎となるが、それは学校にあっても同様で、学校は様々な個に対応する方法や手段を準備しなければならない。

人はすべて異なる人格と能力を持つ、それは理念ではなく目の前にある現実であり、生徒の現実の姿にあった教育をしていくことが求められている。わずか5日間の学校訪問であったが、表面的な部分だけでなく、アメリカの学校が抱える様々な課題を内側から直接見ることができたことは大きな収穫であった。

(2)　研究の概要

①学校の概要

マーティン中学校はノースカロライナ州グリーンビル市から北西に50キロ近く離れたタルボロ市にある公立の中学校である。毎朝7時45分にホテルを出発し、広大な田園地帯が広がる直線の道を約50分かけて通勤した。昨年9月にこの地を襲ったハリケーン「フロイト」の被害の爪痕がいまだに残り、流出した2つの小学校の生徒を受け入れるためのプレハブの簡易教室が校舎の裏手につくられている。

6年生から8年生まで全校生徒約800人の内、約62%がアフリカ系アメリカ人、35%が白人、残り3%がスペイン系であり、2階建ての校舎を各学年ごとに区切って授業が進められている。特に、6・7年生では学年を3つのブロックに分けている。（各ブロック 約80名）更に、各ブロックを26～27人程度の3つのグループに分け、それぞれ3人の教師がチームをつくり、グループごとに同じ授業を受けるブロック・システムを採用している。各チームの教師たちは選択教科の時間にミィーティングを行い、学習指導や生徒指導について協議をする。時には3学級合同でのプロジェクトやイベント等、各チームの裁量で柔軟性のある時間割を組むことができる。必修教科の教師が日本における学級担任のような役割を果たしており、自分たちのチームの生徒にある程度の責任を負っているように見受けられた。

②選択教科の導入（Elective Subject）

個に応じた学習指導という点で、アメリカの学校の選択教科の豊富さは日本とは比較にならない。マーティン中学校でも学年を問わず、国語・数学・理科・社会といった必修教科の他に、音楽・美術・コンピューター・外国語等、1日2時間の選択教科があり年間180日を通じて行われる。一人一人の個性や学習への要求に対して、機会を最大限に生徒に提供し、自分の個性に応じて自らが選択する能力を育成している。

フランス語・スペイン語の他に、日本の企業を誘致し、日本人のコミュニティーとの接触を前提にした日本語の授業もあり、日本人の教師がＯＨＰで Family Tree を提示し、家族についての簡単な言い方の練習をさせていた。日本語を選択している生徒は15名程度と少なかったが、訪問初日に彼らが分担して我々のグループに校舎を案内してくれた。日本語及び日本の文化に対する関心は強いものの、教師によると、アメリカの広大さまた経済的な面から、生徒たちは自分が生まれ育った場所以外は余り知らず、朝4時に出発して、夜9時に帰るというWashinton, D. C. への遠足を計画中であるという。日本の中学生が800ドルもかけて東京への修学旅行をすることを言うと、一様に驚きのよう

すであった。次に7年生を中心に行ったアンケートの結果を報告する。

日本に関する意識調査（対象：7年生50名、T-F Test）

1．日本は世界で最も安全な国の一つである。【YES：26，NO：24】
2．日本の国土はカリフォルニアとほぼ同じである。【YES：24，NO：26】
3．日本の土地の約70%は山である。【YES：36，NO：14】
4．日本は4つの大きな島と4000以上の小さな島からなる。【YES：40，NO：10】
5．日本の国旗は『日の出』を表している。【YES：38，NO：12】
6．日本の人口は合衆国の約半分である。【YES：12，NO：38】
7．日本人は黒い髪と黒い瞳をしてみんな同じように見える。【YES：40，NO：10】
8．日本には極端な貧困はない。【YES：24，NO：26】
9．日本の道路は狭く非常に混雑している。【YES：32，NO：18】
10．日本語は縦にも横にもかける。【YES：42，NO：8】
11．日本の住宅の価格は非常に高い。【YES：29，NO：21】
12．日本には白い色の車が多い。【YES：34，NO：16】
13．日本人は余り英語をしゃべらない。【YES：30，NO：20】
14．日本人は家に入る時、靴を脱ぐ。【YES：46，NO：4】
15．日本人は床の上に布団を敷いて寝る。【YES：36，NO：14】
16．日本人はよく生の魚を食べる。【YES：42，NO：8】
17．日本人は風呂が好きで、バスタブの外で体を洗い流す。【YES：10，NO：40】
18．牛肉の値段は大変高く、1ポンドのサーロインが20ドルする。【YES：22，NO：28】
19．文字を読み書きできる人の割合はほぼ100%に近い。【YES：27，NO：23】
20．中学生は高校へ入るために『入学試験』を受ける。【YES：42，NO：8】
21．中学生の多くが学校が終わった後『塾』に通っている。【YES：35，NO：15】
22．日本ではほとんどの学校で『制服』を着なければならない。【YES：43，NO：7】
23．夏休みにはたくさんの『宿題』がある。【YES：16，NO：34】
24．日本では土曜日にも授業がある。【YES：30，NO：20】
25．午前中4時間、午後2時間という時間割が多い。【YES：41，NO：9】
26．50分の授業で10分の休み時間というパターンが多い。【YES：40，NO：10】
27．授業終了後、生徒は校舎・教室の清掃をしなければならない。【YES：36，NO：14】
28．生徒は新学期に『雑巾』を2枚持ってくるように言われる。【YES：31，NO：19】
29．ほとんどの生徒が放課後学校に残り、クラブ活動をする。【YES：46，NO：4】
30．教師が校門に立ち、遅刻してくる生徒の指導をしている。【YES：36，NO：14】

この調査は学校紹介の授業の時間の中で、授業の導入として、T－Fテストの形で実施したものであり、実際にそれぞれの項目について知っていたかどうかを確認したものではない。個人によって差があったが、概して、日本の学校についてはかなりの生徒が知っているような印象を受けた。グループで外国の文化をレポートする授業でも、日本について調べたいという希望が一番多いということである。

〔生徒指導のあり方〕

○ルールの尊重

自由の国アメリカから予想していた授業・生活の様子は、現実とはかなり異なっている。教師は自分の教室を持ち、その教室で学習する以上、最低限守らせるべきルールを壁に掲示し、それに従って指導をしている。どのクラスも大変静かで、落ち着いた雰囲気の中で行われていたが、何らかの理由で廊下に立たされて

いる生徒も多く見かけた。生徒が少しでも騒ぐと指導する場面も多く、教室を移動する際にも、教師が誘導し一列に並んでから整然と移動する。日本の学校では最近見られなくなってきたこのような光景について質問すると、『教師の使命は基礎学力の定着と学力の向上にある以上、生徒が静かにしなければ教師はなにもできない』とのことで、授業は規律の上に成り立ち、社会生活を営む上での基本的なルールは自分のために、また全員のためにしっかり守るという教育が徹底していることを再認識した。

初日に訪問した高校では、"resouse person"として地区の警官が待機し、管理職はトランシーバーを片手に忙しく校舎を巡回していた。新任の教師には『クリスマスまでは笑うな。Never laugh until Christmas!』と忠告するらしい。アメリカ社会の一つの縮図としての学校において、生徒を管理し規律を保つためのマニュアルが必要なのは当然かも知れない。

○生徒指導・校則について

マーティン中学校においても校則が規定されており、以下のような行為に対して段階的に罰則も定められている。学校への遅刻、授業遅刻、授業途中での退室、授業準備をしていない、授業妨害、教師に対する礼を失した振る舞い、指定場所から離れる、食堂での行動、スクールバスでの行動、非協力的な態度、けんか、喫煙、盗み、嘘をつく、危険な物品の所持・使用、粗暴、ドラッグ、アルコール等である。同時に、問題行動に対しての教師の対処の仕方もマニュアル化されている。また学校外での生徒の行動に対しては、生徒本人と保護者の責任であり、問題行動に関しても警察及びソーシャルワーカーが処理に当たり、教師が表に出るようなことはまずない。

○スクール・カウンセラー

生徒の問題行動に対して実際に指導に当たるのは、カウンセラーや校長・教頭である。初期の段階では教師も指導に当たるが、教師からの委託を受けて、カウンセラーが保護者、本人と話し合い解決を図るのが普通である。カウンセラーの業務としては友人関係、教師とのトラブル、家庭での問題、成績や進学の悩み等、日本の学校における養護教諭のような役割も果たしている。学校のシステムや法律そして心理学やカウンセリングの専門知識も必要であり、教師とは独立した専門ポストとして、生徒が抱える様々な問題に関して相談にのり、いっしょに解決していこうとする生徒指導面での重要な役割を果している。複数の学校をかけもちするような場合もあり、絶対的な数が不足しているとのことである。

○ブロック・システムの新しい試み

1つのブロックを80人程度の生徒で構成し、更に25、6人の3つのグループごとに教室移動をして、同じメンバーで授業を受けるシステムである。日本の学級制の考えを取り入れようとしたものであり、グループを同じメンバーで固定することによって協調精神やチームワークを養うことを目標とする。個人主義を基本とするアメリカにおいて、逆に、日本的な『集団の力』が見直されているとも言える。

マーティン中学校では、このシステムを更に発展させて、3人のチームによる1つのブロックの3年間の『持ち上がり』を前提とする『スクール・イン・スクール』というプロジェクトが数名の教師の提案で進められている。来年度の6年生から、人種構成及び国語と数学のレベルを他のグループと均等に配分した1つのブロックを実験的に3人のチームで担当する。制服を導入し、日本的な学級担任による『道徳教育』を取り入れ、授業参観も含めて家庭との連携を深め、3年後の成果を問うという。既に、教育委員会、大学の関係者等からの賛同を得て、今年9月からスタートする予定である。この提案の背景には教師の学年固定、そして校長による指導グループの任命がある。つまり、7年生担当の教師は、毎年7年生を指導し、能力別編成にしたがって3人のチームが編成されるというシステムに対する反発があるのかも知れない。

"If you want something you've never had, you have to do something you've never done!"という言葉がスローガンとして掲げられ、今回の学校訪問で4日間我々の面倒を見てくれた若手の教師集団の熱意とチャレンジ精神を感じた。

〔現地調査の日程〕

日　時	場　所	内　容	関係者・関係機関 (所属・所在地・連絡先等)
3 /27 (月) 8 ：30 10：00 13：45 15：00 16：00	Rose High School Martin Middle School Wahl-Coates Elemantary School East Carolina University	・校長による概要説明 ・校舎・施設の案内 ・授業参観 ・校長による概要説明 ・日本語教室の生徒による校舎施設の案内及び授業参観 ・副校長による概要説明 ・校舎・施設の案内、授業参観全校集会での教師・生徒との交流 ・教育学部長との懇談 ・学長及び副学長との懇談	J. H. Rose High School 600 West Arlimtonblvd. Greenville, NC 27834 Martin Middle School 400 East Johnson St. Tarboro, NC 27886 Wahl-Coates E. S. 2200E. 5th St. Greenville, NC 27858-3003 East Carolina Univ. 306 East 9th St. Greenvill, NC
3 /28 (火) 9 ：00 10：00 11：30 13：30 14：30	Martin Middle School	・日程についての打ち合わせ ・選択教科『日本語』の授業参観 ・6年学年部会参観・協議 ・授業参観と協議（6年数学） ・授業参観と協議（7年社会） ・担当教師との打ち合わせ（今後の日程と内容について）	Martin Middle School 400 East Johnson St. Tarboro, NC 27886 6th Grade Teachers Ms. Amy Marshall Brown Ms. Mary Barnes Mr. Marshall Matson
3 /29 (水) 8 ：30 9 ：15 10：40 11：30 12：30 14：00 15：00	Martin Middle School	・『日本語』の授業参観 ・授業の打ち合わせ ・授業実践 (学校生活) ・スペイン語の授業参観 ・『情報教育』授業参観 ・授業実践 (学校生活) ・カウンセラーとの協議 ・職員会議への参加、歓迎会	Ms. Chiho Kiyotsuka Mr. Schott Tiernan Ms. Sugg Ms. Pchelka Ms. Shawna Andrews Ms. Moore, Mayer-Counselors
3 /30 (木) 8 ：30 9 ：00 9 ：30 13：00	Martin Middle School	・Tarboro市内の視察 ・郡教委とのmeetingの参観 ・7年生合同授業参観 ・担当教官との打ち合わせ	Mr. Marshall Matson Mr. Marshall Matson Mr. Scott Tiernan
3 /31 (金) 8 ：30 9 ：45 10：25 11：33 13：45	Martin Middle School	・6年生授業実践参観 (Mr. Fukuda)・避難訓練参加 ・7年生授業実践 (日本文化) ・8年生授業参観 (国語/数学) ・Tarboro 市内視察 (昨年9月のハリケーンによる被害) ・合同集会 (歌とスピーチ)	Mr. Girvan Ms. Andrews Ms. Grady/Mr. Lindsay Mr. Marshall Matson

4/1(土)〜 4/2(日)	Atlantic Beach Fort Macon St. Park. New Bern	・アトランティックビーチ フォート・メイコン及び ニューバーン市内視察	
4/3 (月) 9：00 13：00	Exploris M. S. D. P. I	・副校長による概要説明 ・校舎施設の案内、授業参観 ・ノースカロライナ州教育委員会訪問	Exploris Middle School Department of Public Instruction 301 N. Wilminton St. Raleigh NC 27601

(3) 研究の結果と考察

今回の学校訪問で感じたことは、まず、アメリカの教育がシステマチックに運営され、様々な面でマニュアル化がなされていることである、学校の中に多様なクラスが存在し、教師のみならず、管理職、カウンセラー、カフェテリアの従業員、事務職員、メディア・スタッフ、ジャニターと呼ばれる掃除専門の人等、合理的に分業が進み学校が運営されている。

次に個に応じた指導のあり方が異なることである。日米の比較で言えば、平均的な集団の中に埋没してしまった個性にいかに焦点を当てるかということで日本は悩み、母国語をも異にする多種・多様な個人を能力別に等質集団として形成し、いかに一定のレベルまで高めるかということにアメリカの悩みがある。

個人のニーズにこたえるための数多くの選択肢、施設設備の充実、能力に応じた少人数のクラス編成、個人へのカウンセラーの援助等、いかに個に対応するかを追求した結果が現在のアメリカの教育システムであるように思われる。しかし、余りにもシステムやマニュアルを重んじ、効率化を図る余り、最も生徒に近いはずの教師が、単に教科を指導するだけの存在になってしまっているような気がしてならない。

一国の教育制度はその国の文化に根ざしたものであり、安易に批判したり、また模倣すべきではないのかも知れない。しかし今回訪問したマーティン中学校において、現状に甘んじることなく、日本の教育の優れたところを取り入れようとする教師の熱意だけは、どこの国にあっても評価されるべきものであろう。

(4) 今後の展望

ＧＰＳプロジェクトの目的は日米間での教員の相互訪問を継続しながら、各学校レベルでの国際パートナーシップを築くことにある。姉妹校締結も視野に入れ、交互に訪問を継続していく以上、早い段階で日米の学校間のマッチングが必要であり、行くたびに違う学校を訪問するのでは意味がない。ＥＣＵ地区では、今回、大阪、広島、徳島の３名の中学校の教師がマーティン中学校を訪問したが、今年６月に日本に派遣される２名は、事前に広島地区に決まっていた。５日間の訪問は有意義であり、交流を深めることはできたものの、他の２名にとっては単なる研修に終わったような気もする。

ディレクターのスペンス教授には大変お世話になった。今回のＥＣＵ地区の研修計画のみならず、朝から晩まで細かな配慮をしていただき感謝している。旅行会社を通しての観光旅行でなく、個人として外国の団体の世話をするのは気苦労も多かったことと思う。大学関係者がすべての手配をするということに、多少無理があるのではないかと感じる。

今回の研修中に感じたことは次のような点である。

○ 事前に受け入れ校がわからず、連絡が取れない状態が続いた。現地に行ってから直接担当者と交渉したが、授業の準備をしたものの、結局できなかった参加者もおり、今後の改善が望まれる。

○ 言葉の問題が最大のハードルある。英語教師の語学研修ならともかく、行く先々で英語のシャワーを浴びると、それだけでストレスがたまる。今回のプロジェクトでも英語を専門としない教師の参加が多かった。通訳も不足している。

○ 研修中のジャーナル・キーピング及びリフレクション・ミィーティングは必要であるが、今回のように項目別に違った内容の書式ではなく、一日ごとの行動記録と質問及び感想が時間を追ってメモできるようなものが望ましい。

○ ＥＣＵ地区では、参加者の希望及び受け入れ先の

関係でホームステイがキャンセルになり、アトランテック・ビーチへの研修旅行になった。初めてアメリカを訪問した人もいる以上、グループの親睦もかねてこういう機会を得ることは必要である。

○　外国の生徒相手に授業をすることは非常にいい経験となる。マーティン中学校で授業をする機会を持ったが、"Kids are Kids." という印象が強い。6月の来日の際には、ぜひノースカロライナの先生方にも日本の生徒に授業をしてもらいたい。

○　今後の交流が継続するか否かは、教科を問わず、すべて参加する教師の積極性にかかっている。『姉妹校締結』に関しては、リーダーシップを発揮する存在とともに、管理職を含めた学校全体の共通理解が必要である。

(5)　おわりに

アメリカ教育省によると、新任教師の実に3割が1年で退職してしまうらしい。慢性的な教員不足の状況である。その原因としてはアメリカにおける教員の社会的地位の低さ、新任教師の授業運営への援助、研修及び指導の不足等があげられる。待遇の面でも、夏期休暇中の給与が支払われなかったり、地区によって給与に差がある。こどもを教え育てるという教育の場において、これは深刻な問題であろう。日本のように、教師が時として親の代わりというのではなく、純粋に教えるだけの仕事に専念できる環境にありながら、十分に力を出し切っていないように思えるのも、地位の低さが原因であろうか。学校の役割と教師の責任範囲が明確であることはうらやましい限りではあるが、反面、矛盾や問題点も多いように感じた。

今回、日本を離れ、アメリカ教育現場を見る機会を持てたことは、逆に、日本の教育や社会を客観的に見直すきっかけとなった。教師を目指して教育実習に取り組む学生と話ができたこと、そして、理想に燃え、学校の中の改革に取り組む教師たちと知り合えたことがなによりの収穫である。今後も交流を続けていきたい。